

4. 鹿田遺跡出土猿形木製品について

(1) はじめに

鹿田遺跡第7次調査地点溝21から出土した遺物中に、猿形木製品一点が含まれていた。これは全国的にも出土例が少ない、希少な遺物である。本稿では猿形木製品の特徴を整理し、その用途について考える。また類例の分布状況を参考に、中世社会の一部に迫ってみたい。

(2) 鹿田7次猿形木製品の特徴

まず本文中に記載しているが、もう一度、鹿田遺跡の猿形木製品について詳しくみていくこととしよう（第95頁参照）。

カヤの木を材とし、削りだしによって烏帽子を被るニホンザルの姿を精巧に表している木製品である。高さ9.2cm、最大幅2.7cm、厚さ1.4cmである。

顔面と尻は赤く塗られ、目・鼻・口は黒漆を用いて線で描かれる。烏帽子は赤漆と黒漆により横縞模様の彩色が施される。またサルの背中には体毛の表現が、同じく黒漆で施されている。烏帽子頂部のカーブ、サルの顔面、背中カーブ等随所の仕上げは丁寧で、作り慣れた手によるものと考えられる。腕にあたる部分に穿孔があり、腕を示す棒や紐など何らかのものが嵌められる構造であろう。また体部の底（脚の裏部分）にも径0.3cmほどの孔があり、棒を突き刺していたものと推測される。以上のような構造から、本木製品は底面に棒をさして動かす操り人形の一種としての用途が推定される⁽¹⁾。烏帽子を被っている姿から、猿回しの猿を模しているもの、また「三番叟」を舞わせる人形とも考えられる。

この資料は溝21からの出土である。溝21は、溝22・23と重複・連続した溝群を構成しており、溝21～23が機能した時期は14世紀前半～近世と考えられる。第7次調査地点のほぼなかほど、構内座標BUラインに沿うように東西に走行し、57・58ライン間でほぼ直角に南方向へと走行方向を変える溝群である。数回の掘り返しを行いながらも長期にわたって機能している溝群の配置から、溝群の走行するラインが土地の区画にとって重要な意味を持つことを窺わせる。この出土位置を、猿形木製品の特徴を考えるうえでのポイントとして押さえておきたい。猿形木製品は溝群の中では古い段階の溝21の底面近くから出土し、共伴する遺物の時期から、14世紀前半に比定される。

このような猿形木製品の類例は、現在のところ2例である。また猿形ではないが、操り人形の類例もあわせて、次に記す。

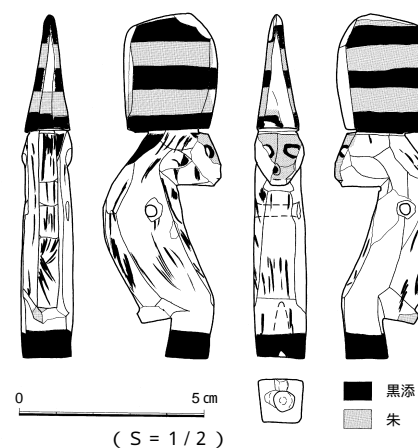


図154 鹿田遺跡猿形木製品

(3) 猿形木製品の出土例

これまでのところ、猿形木製品の類例としては以下の二遺跡の出土品がある。

1) 百間川米田遺跡⁽²⁾ 岡山市米田・右岸用水路調査区15区

百間川米田遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されている集落遺跡である。特に鎌倉時代・室町時代以降においては、「運河」状の大溝と建物群等から構成される港町的な海浜集落とみなされ、瀬戸内海を中心とする海運を基盤として発展した集落の状況が窺える。

猿形木製品（図155、156 - 2）は中世包含層の出土である。材質は不明で、長さ6.8cm、最大幅1.6cmを測る。

腕部と脚部の2ヶ所に径0.2cmの穿孔、腕の穿孔は四角、脚部の方は一部破損していることもあり、穿孔の形はよくわからない。目と鼻を墨書で表現しており、正面からの猿の顔をよく表している。時期としては中世後半と考えられる。

この木製品には、底面の穿孔はみられないが、腕・脚部の穿孔は、そこに棒状あるいは紐状のものを差し込んで、可動する手足を表すものと考えられる。



図155 百間川米田遺跡
猿形木製品 (S = 1 / 2)

2) 豊後府内遺跡⁽³⁾ 大分市府内

豊後府内遺跡は鎌倉時代から戦国時代の終わりまで豊後地方を治めた大友氏の居館を中心とする集落遺跡である。平成8年度以降、大分市・大分県による発掘調査が行われ、現在も継続中である。東西0.7km、南北2.2kmの広大な範囲にわたり、随所で調査成果が積み上げられ、戦国時代の「府内」の様相が次第に明らかになりつつある。また特徴的なこととして、戦国時代に描かれたと伝えられる「府内古図」の存在がある。これについても、検証作業が行われ、現在3種類が確認されている「府内古図」は寛永年間に成立したものとみられ、絵図上と現在の地割り・発掘調査成果との間で再検討が行われている。

猿形木製品は万寿寺北側掘出土である。現在のところ概報で紹介されているのみで、詳細な時期の検討を経ていないが、出土遺構の内容は次の通りである。万寿寺は1306(徳治元)年に大友貞親により建立された禅寺で、少なくとも16世紀代には大友氏の迎賓館的施設となっていたことが知られている。木製品は万寿寺の北の境となる掘から出土している。この掘には16世紀前半のものと、16世紀後半のものが確認されている。この掘については大分川とつながっていること、小型の船の通行が可能な規模を有していること等から、様々な物資交易の重要な交通路をなしていたと考えられている⁽⁴⁾。そしてその見解を裏付けるように様々な遺物の出土が認められる。

木製品⁽⁵⁾は長さ約6cmで、顔と尻は朱塗り、ほかは黒塗りである。手と足は削りだしにより、体の前面に突き出したような形態をとっている。手の部分には上下方向の穿孔がみられることから、なにか棒状のものを手に持たせていたことが想定される。やや推測を重ねると、現代の人形にも例が見られるような、御幣をもっていたことも考えられよう。また鹿田木製品と同様、底面に穿孔が認められる。以上のことから、府内木製品についても、操り人形の一種と考えることができそうである。時期については、正式な報告をまたなければならないが、現段階では16世紀代とされている。

3) 円覚寺門前遺跡⁽⁶⁾ 鎌倉市山ノ内

猿形ではないが、操り人形の類例として、鎌倉市円覚寺門前遺跡の山猫形木製品(図156-3)がある。

円覚寺門前遺跡は1282(弘安5)年創建の円覚寺境内に所在する。鎌倉時代末期に描かれたとされる「円覚寺境内絵図」にある門前町一帯にあたり、発掘調査の結果、門前町を横切る馬道と側溝、その側溝に直交する溝が検出された。これらの馬道・溝の時期は13世紀末～14世紀代と考えられている。

山猫形木製品は上述の馬道側溝のひとつである溝1bから出土している。幅6.2cm、高さ4.8cm、厚み6.4cmを測る。山猫の頭部をかたどったもので、底面に穿孔がある。この点が鹿田木製品・府内木製品と同じ構造であり、棒状のものを差し込んで動かすものであろう。この木製品については報告書中に詳細な考察⁽⁷⁾が掲載されており、操り人形の一種であると考えられている。また時期は、14世紀後半と報告されている。

同じ溝からの山猫形木製品以外の出土遺物をみると、数多くの木製品の中に製作途中のものや、再加工品が多く見いだされるほか、機織り具や加工具といった道具類が多い。このことから報告では、この門前町一帯に多くの職能民が住み着いていたものと述べている。

(4) 人物・動物をかたどる木製品

以上、猿形木製品・操り人形の類例についてみてきたが、ここで人物・動物をかたどった木製品について概略をみておこう。出土例すべてに目を通すことができなかったが、『木器集成図録 近畿原始篇』・『木器集成図録 近畿古代篇』⁽⁸⁾掲載資料に拠ってその概要をみると、弥生～古代にかけての人物・動物をかたどった木製品は、祭祀具に分類されている。『木器集成図録 近畿・原始篇』では「祭祀具」中の動物形の項に31例があ

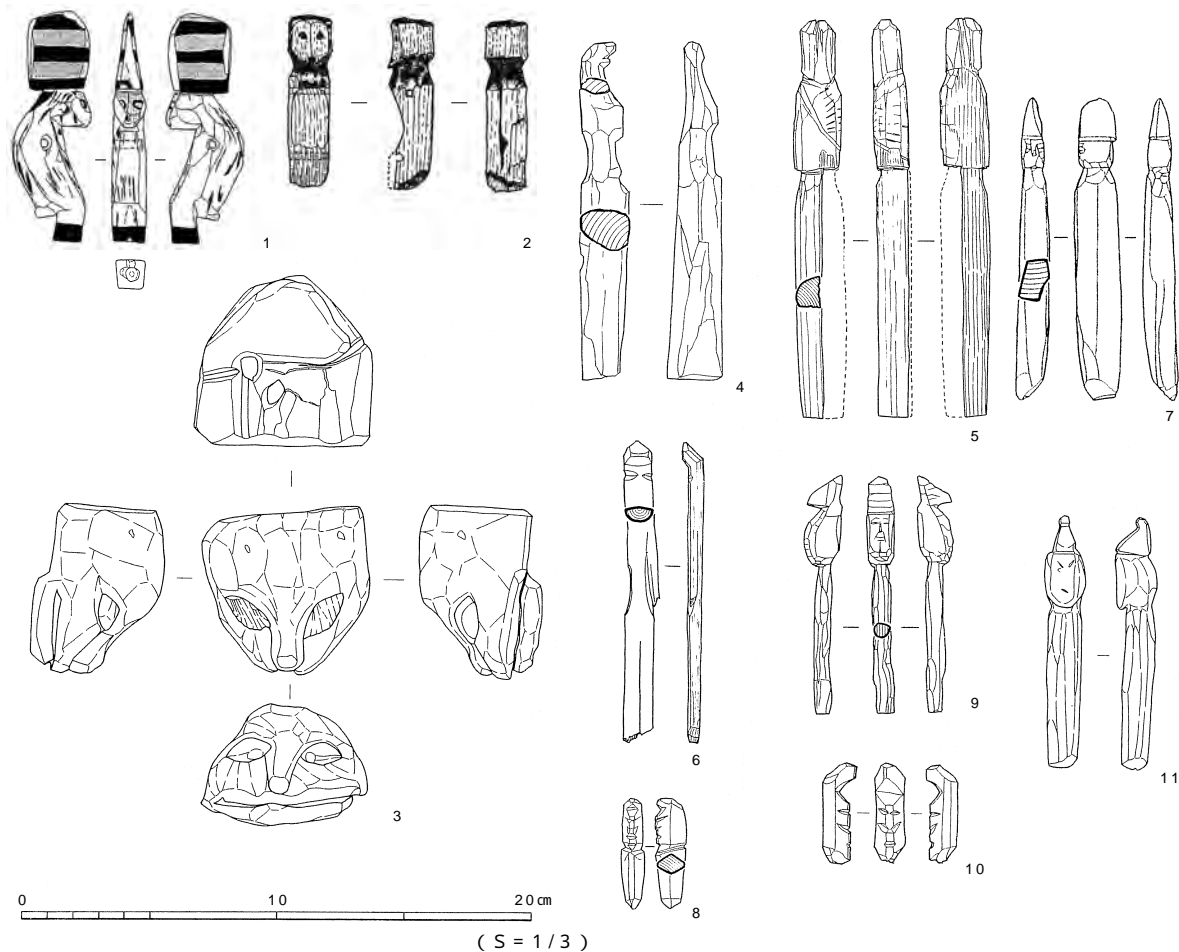


図156 猿形・山猫形・人形木製品

表18 猿形・山猫形・人形木製品一覧

図*	種類	時期	出土遺跡	樹種	長(高さ/cm)	幅(径/cm)	厚さ(cm)
1	猿形	14世紀前半	鹿田遺跡	カヤ	9.2	2.7	1.4
2	猿形	中世後半	百間川米田遺跡	-	6.8	1.6	-
3	山猫形	14世紀後半	円覚寺門前遺跡	-	4.8	7.4	6.2
4	人形	694 - 709年	藤原宮跡	ヒノキ	13.3	1.9	1.6
5	人形	8世紀前半	平城宮	ヒノキ	15.8	1.9	1.2
6	人形	730年頃	平城宮	シイ	12.0	1.1	0.6
7	人形	13世紀	鳥羽離宮跡	ヒノキ	12.2	1.7	1.0
8	人形	755年	平城宮	ヒノキ	4.3	1.2	0.9
9	人形	12 - 13世紀	尊勝寺推定地	ヒノキ	9.5	1.0	1.0
10	人形	694 - 709	藤原宮跡	ヒノキ	4.0	1.1	-
11	人形	14世紀後半	円覚寺門前遺跡	-	10.0	0.85	-
	人形	8世紀後半	平城宮	マツ属	26.2	4.8	3.9
	人形	8世紀	平城宮	モミ	34.9	4.5	3.9
	人形	730年頃	平城宮	モミ	15.2	2.1	0.8
	人形	747年頃	平城宮	未同定	6.3	1.1	0.9
	人形	9世紀	兵庫県/吉田遺跡	ヒノキ	15.0	1.9	1.4
	人形	9世紀前半	平安京西寺跡	ヒノキ	15.3	1.8	1.0
	人形	9世紀前半	平安京	ヒノキ	14.5	3.0	-
	人形	8世紀	平城宮	ヒノキ	3.2	1.3	0.7
	人形	784 - 794	長岡京	ヒノキ	7.4	2.7	-

図156掲載のものには番号を付した。

り、その内訳は鳥形16点・馬形7点・その他8点となっている。猿形の例は現在のところ知られていない。そこで近似する例として人形をみてみよう。人物をかたどる木製品としては、弥生時代の木偶として9点が掲載されており、いずれも神をかたどるものと理解されている。古墳時代には人形の出土例がない。古代以降となると、『木器集成図録 古代篇』にいくつかの例が見られる。分類としては祭祀具中の「形代」として馬形・鳥形・舟形などさまざまな器物・禽獣をかたどった遺物のひとつとして「人形」も挙げられる。これらの木製品は前述した弥生・古墳時代以来の伝統に基づくもの（鳥形・舟形・木偶など）と、7世紀以降新たに出現するもの（人形・馬形など）とに大別される。後者のうち、人形は正面全身人形・側面全身人形・顔形・立体人形の4種に大別されている。その4種のうち、正面全身人形・側面全身人形・顔型はいずれも板状であるという特徴がある。立体人形は、その名の表すとおり、立体的に人物を模したもので、他の3種とは全く異なるものである。鹿田遺跡の猿形木製品との関連でみると、形態的に最も近似するものは「立体人形」といえる。

「立体人形」についてもう少し細かくみることにしよう。その多くは棒状の材の一端に人の頭部を粗く彫刻したもので、衣服までを表すものはほとんどない。『木器集成図録』掲載の16点は8世紀前葉～13世紀代のものであり、その詳細は表18に示した。長さ26cm～35cmを測る2点（3・4）を除くと、長さ15cm、幅3.0cmまでの法量におさまっている。全体の形状では頭部の表現のみのものと、被りものの表現のあるもの（図156-4～10）がみられ、それらには墨で描写するものと、彫刻・線刻で表現しているものがある。被りものは、烏帽子あるいは、頭巾状のものの表現と推定される。烏帽子かのように、横の線刻あるいは、横方向の加工痕のみられるもの（同8・9）もあるが、彩色されていたり、確定できるものはない。立体人形は、人形の中でもよりリアルに表現されるという点で、他の人形とは区別されるものの、その用途についてははっきりしたことは不明であり、現状では形代の一種としておくほかない。

猿形木製品との関連でみると、操り人形であるか否かの判断は、端的には下面の穿孔の有無に拠っている。鹿田木製品・府内木製品・山猫形木製品の三例については、この下面穿孔によって、棒状のものを差し込んで動かす「操り人形」と考えている。もう一点の猿形木製品である百間川米田遺跡例については、穿孔がみられないことから、現段階では立体人形の類に入るものとする。

ただ操り人形の形状については考古資料からの検討が不十分であり、立体人形のなかにも棒を差し込むものとは別の動かし方で操るものがある可能性も考えられ、今後検討していくこととしたい。

(5) 古代・中世の「猿」を巡って

以上、鹿田遺跡猿形木製品について、類例を紹介してきた。これまで述べてきたように、本資料は操り人形の可能性が高いと考えられる。こういった操り人形の演技手は「くぐつまわし、傀儡子（以下「くぐつまわし」と記す）」と呼ばれる人々であると言われている。ここでは、「猿」自体と、演技手であるくぐつまわしに関して、文献史料に触れながら述べることにする。

1) 猿

猿は古来より馬の疫病を防ぐ守神として知られており、室町時代頃までは猿を厩で飼う習慣があったそうである。また農村では、猿の頭骨や猿回しの絵馬・札など猿にちなんだものを厩に取り付けるといふ風習が近年まで行われていたと言われている。また文献上に現れる猿回しの記録としては以下のものが挙げられる。

● 吾妻鏡寛元三年

四月二十一日乙酉 天霽

左馬の頭入道正義美作の国の領所将来の由を称し、猿を御所に献ず。彼の猿の舞踏人倫の如し。大殿並びに將軍家御前に召覧す。希有の事たるの旨御沙汰に及ぶ。教隆云く、これ直なる事のみ非ざるか。

寛元三年（1245年）に足利正義が美作の国より、御所に猿を献じ、將軍に猿回しの舞を見せ、大いに喜ばれた

とある。この記載が猿回しに関する最古の記録である。この記述に現れる猿は、美作国から奉ぜられたものとあり、猿形木製品の類例が少ない中で、二点が岡山県の出土例である点とあわせて興味深い点である⁽⁹⁾。

上記の文献にもあるように、猿回しはもともと縁起物として、「さる」が「去る」に通じることから祓いの意味も有しており、正月等に演じられるものであったようである。それが次第に大衆芸能として広まっていったとみられる。また猿回しに関する記述が「吾妻鏡」を初出として13世紀前半から認められるようになることから、猿回しの成立もおおよそこの時期と考えられている。

一方、鹿田木製品は烏帽子を被った姿が大変特徴的であり、その点は「三番叟」を想起させる。三番叟は能の「翁」と、それに続く狂言の「三番叟」を写したものとされている。踊りとしてだけでなく、舞台の儀式としても古くから盛んに行われ、能では神聖な儀式曲として扱われているようである。三番叟は五穀豊穡を祈るという意味もあって、新年の初会や祝い、顔見せの序幕には必ず冒頭に舞われるものという。この三番叟の外観には、地域や時期によって様々な形態があるようであるが、「烏帽子を被っている」点は共通している。また踊り手は猿の面をつける場合や、猿の動作を真似て滑稽に演じられる場合がみられる。三番叟自体は、江戸時代に入って完成された形態として演じられたものと考えられるが、起源としてはもっと古く、平安時代の猿楽の舞に求められるようである。とすると、14世紀前半に廃棄された鹿田木製品も、こういった舞を舞わされたのかもしれない。

2) くぐつまわし

くぐつまわしの名称と人形まわしを生業としている点とは、元々は中国に起源があるとされる。ただ日本で芸能として発展してきた歴史は古く、11世紀中葉に成立したとされる『新猿楽記』中に「くぐつまはし」の記述が認められる。「くぐつ」自体は『日本書紀』中にも記載が見られ、木製の人形を指す言葉である。くぐつまわしは定住せず、水草のごとく漂泊し、田畑を耕作することなく、いかなる課役もないとされる。平安時代の記述には、「主として狩猟生活を営みながら、幻術的な芸能を行うものたち」とある。こういった記述のなかに、くぐつまわしは、「東国・美濃・三河、遠江等から山陽播州・山陰馬州、さらに西国」と、おおむね海道筋に分布し、まず傀儡女が海道の宿を中心として、次第に定着していったのではないかとの指摘がある⁽¹⁰⁾。すでに多くの先学の指摘があるが、くぐつまわしや猿回し等は、乞食者と呼ばれるような被差別民の一種であり、古代・中世の社会においても、散所・河原などに住みつつ、芸能を生業とて、社会に関わっていた人々に含まれるといえる⁽¹¹⁾。

絵図に認められるくぐつまわしとして、数例の良好な資料が知られている。そのうちの一点『紙本著色洛中・洛外図屏風(歴博甲本)』中に描かれたくぐつまわしの姿を図157にあげた。この人物は首かけ箱回しといわれる体裁である。胸の前に掛けた箱の上に少なくとも5体のくぐつを確認できる。箱の下から手を入れて、これらのくぐつを操作するのであろう。このように手で操作する人形を扱うものに対して「手傀儡」との呼称も見られるようである。



図157 くぐつまわし
『紙本著色洛中・洛外図屏風(歴博甲本)』
(国立歴史民俗博物館蔵)

(6) まとめ

以上、鹿田遺跡出土木製品について、類例・用途など、文献資料にも触れながら概要をみてきた。前述してき

た木製品の時期は、鹿田木製品が14世紀前半、山猫形木製品が14世紀後半、百間川米田木製品が中世後半、府内木製品が16世紀代である。鹿田木製品が現在のところ、操り人形の例としても、猿形製品の例としても最古の事例と言える。

再度、出土状況を考えてみよう。鹿田遺跡第7次調査地点、溝21は屋敷地を巡る大型の区画溝として機能し、14世紀前半に埋まった溝である。ここで述べてきた木製品は、中世において流通の拠点であったり、門前町であったり、人々が大勢集まる賑わいのある集落遺跡からの出土であることを一つの特徴といえることができる。大型の屋敷地の周辺や、人の往来の頻繁な道路の近く、あるいは、海運を担う運河に沿った町といった情景を、これらの木製品を出土する遺跡からは想定される。そういったにぎわった町並みに、くぐつまわしや猿回しといった職能民らも集まってきたのであろう。

残念ながらまだ類例が数少なく、これ以上の検討を進めるには甚だ材料不足ではあるが、鹿田木製品は、現在のところ最古の出土例であり、くぐつまわしの初期の様相に迫る実資料と言える。またさまざまな職能民が集まってくるような場が、鹿田遺跡第7次調査地点付近に存在していたことの、具体的な証左のひとつともいえる。このことは鹿田遺跡全体の性格を考えていくうえでも重要な手がかりとなろう。

今後の課題山積ではあるが、考古資料の面からも、中世の芸能・職能といった面をひもといていく資料として、鹿田遺跡猿形木製品を評価することができよう。

(岩崎志保)

* 資料調査その他にあたり、下記の方々・機関に御協力・御教示頂きました(敬称略)。

大橋雅也・加納克己・佐藤寛介・岡山県古代吉備文化財センター・大分県教育庁埋蔵文化財センター・鎌倉市教育委員会・吉備考古館・国立歴史民俗博物館・山本悦世

註

- (1) 加納克己氏の御教示による
- (2) 岡本寛久編 1989『百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
- (3) 加藤美成子 2004「中世大友府内町跡 第20次C調査区」『大分県文化財年報12平成14(2002)年度版』
府内遺跡については下記報告書参照
坂本嘉宏ほか 2005『豊後府内1』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書1
坂本嘉宏ほか 2005『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書2
坂本嘉宏ほか 2006『豊後府内3』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書3
高橋信武 2006『豊後府内5』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書10
- (4) 大分県教育委員会 2003『発掘された宗麟の城下町』vol.2
- (5) 以下の所見を含めて、資料を実見した山本悦世氏の御教示による
- (6) 鎌倉市教育委員会 2005「円覚寺門前遺跡(No.287)山ノ内字松岡1344番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21(第2分冊)
- (7) 加納克己 2005「第1面出土の操り人形「山猫」木偶について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21
- (8) 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第36冊
同 1985『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所第27冊
- (9) 吉備考古館(岡山県総社市)に猿の頭部をかたどった土製品が展示されている。現在の赤磐市万富付近での採集品とのことである。須恵質で、目・鼻・口は、刺突により表現。この頭部は本来胴体部分に接合していたものが剥がれたものとみられ、操り人形の種類とは考えがたいが、「猿」の類例として興味深い。
- (10) 林屋辰三郎 1960『中性芸能史の研究』
- (11) 網野善彦・横井 清 2003『都市と職能民の活動』(日本の中世6)
佐藤宗諱ほか編 1988『部落史史料選集 第1巻 古代・中世篇』

参考文献

永田衛吉 1983『生きている人形芝居』